




病害虫発生予察情報予報第7号(10月の予報)


佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫(抜粋)
		平年比	前年比		
水稲(普通期)	トビイロウンカ	多	多	150~152	
	<p>1. トビイロウンカ これまで発生が少なかった中晩生品種(さがびより、ヒヨクモチ等)においても、発生が増加しつつある。圃場での発生状況を随時確認し、幼虫を多数認めた場合には薬剤防除を実施する(9月20日付け病害虫対策資料第10号参照)。</p> <p>2. 紋枯病 一部圃場で上位葉鞘への進展がみられる。各圃場での発生状況を確認し、病斑の進展がみられた場合には直ちに薬剤防除を行う。</p>				
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	少	194~195 201~203	 ハスモンヨトウ
	カメムシ類	並	並	195~196 203~204	
<p>1. カメムシ類 莢の伸長初期~子実肥大中期に防除を実施する。なお、圃場でカメムシ類が散見される場合には、7~10日間隔で2~3回防除を行う。</p> <p>2. 紫斑病 若莢期~子実肥大中期に防除を実施する。</p>					
イチゴ(本圃)	ハダニ類	やや多	多	209~210	 ハダニ類
	うどんこ病	並	やや多	199~201	
	アブラムシ類	やや多	少	214~215	
<p>1. 炭疽病 一部に汚斑型病斑が多発生した圃場がみられる。発病株は伝染源となるため早期に除去する。</p> <p>2. 次年度産親株の病害虫対策 次年度作での炭疽病、萎黄病等の発生を抑えるため、健全親株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では優良原種苗等へ更新する。また、これらの親株についても秋季から炭疽病、うどんこ病及びハダニ類の防除を徹底する。</p>					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キュウリ	べと病	やや多	多	313~314	 黄化えそ病
	うどんこ病	やや多	やや多	315~316	
	褐斑病	並	並	314~315	
	アザミウマ類	並	やや少	317~318	
	コナジラミ類	やや多	多	318~319	
1. ミナミキイロアザミウマ、タバココナジラミ、黄化えそ病、退緑黄化病 既に黄化えそ病が発生している圃場がある。罹病株を認めた場合は、早急に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。未発生圃場においても、媒介虫の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。					
ナス	アザミウマ類	多	多	160~165 247~248	
	コナジラミ類	やや多	やや多	157~159 248~249	
1. アザミウマ類・コナジラミ類 タバコカスミカメを導入した圃場においても、本虫が多発生した場合には、薬剤防除を実施する。					
アスパラガス	ハダニ類	並	やや少	318~319	 褐斑病
	アザミウマ類	やや多	並	317~318	
	褐斑病	やや多	並	315~316	
	茎枯病	やや少	少	313~314	
	斑点病	やや少	並	314~315	
1. アザミウマ類・ハダニ類 本作で発生した虫が次作の発生源となるので、収穫終了後も薬剤防除を定期的に行う。 2. 褐斑病、斑点病、茎枯病 発病茎葉が次作の伝染源となるので、収穫終了後も薬剤防除を定期的に行う。					
タマネギ	1. べと病 感染を防ぐため育苗期から薬剤防除を行う（令和元年8月8日付け病虫害対策資料第5号参照）。				
野菜・花き共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ)	並	並	163, 165 仔ゴ : 212~214 ｽ : 247~248 ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ : 317, 320 ｷ : 394~395	 ハスモンヨトウ

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	並	239~242	 チャバネアオカメムシ
	1. 果樹カメムシ類 ヒノキにおける果樹カメムシ類の寄生数は平年より多くなっている。また、ヒノキ毬果の口針鞘数が園地への飛来の目安となる25本/果に到達もしくは近づいている地点が多くなっており、果樹園への飛来が増加する恐れがある。発生量や飛来状況は園によって異なるため、各園地の飛来状況の把握に努め、飛来が認められた場合には、直ちに防除を実施する。				
カンキツ	ミカンハダニ	多	多	234~236	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	229~233	
1. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので収穫時に取り除き処分する。また、降雨時・結露時の収穫は避けるとともに、果実に傷をつけないよう丁寧に扱う。腐敗防止対策のための薬剤散布は収穫7~10日前に霧状になるノズルを使ってムラがないように散布するが、散布後に100mm以上の降雨があった場合には再散布を行う。					
2. 褐色腐敗病 9月下旬の台風17号の強風雨の影響により多発生となる恐れがある。発病を確認したら早急に罹病果を除去して園外で適切に処分するとともに、薬剤による防除を徹底する。					
3. かいよう病 一部で早生温州等において多発している圃場がある。既発生園や罹病性品種では今後被害の拡大を防ぐため、台風襲来等強風雨が予想される場合は襲来7日前~前日までに必ず防除を行う。					
4. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。					
ナシ	1. 黒星病 翌年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却もしくは園外に持ち出し処分する。				
ブドウ	1. べと病・褐斑病 一部の園で発生が多い。本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却もしくは園外に持ち出し処分する。				
フルーツ キウイ	1. かいよう病 収穫後頃から本病菌の増殖に好適な気温となる。感染を防止するため、発病の有無にかかわらずすべての園において、収穫終了直後から銅水和剤による定期的な防除を実施する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キウ	白さび病	並	並	383~384	 クロゲハナアザミウマ
	アザミウマ類	やや多	やや多	388~389	
	アブラムシ類	並	並	390~391	
	ハダニ類	やや多	多	389~390	
	ハモグリバエ類	並	並	392~393	
	チョウ目害虫	並	やや少	391~392 163~165	
1. アザミウマ類 多発生圃場が認められる。本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、発生状況をよく確認し、低密度時から、散布むらがないよう十分量を丁寧に散布する。					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

10 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 10 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（令和元年 9 月 25 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 10 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	30 (18.6℃)	50	高
降水量	30	40 (76 mm)	30	並

Ⅲ. 10月の予報

水稻（普通期）

定期調査：46 圃場
調査日：9月17日～19日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) トビイロウンカの発生状況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 23.1%（平年15.1%、前年0.1%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：多（+）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

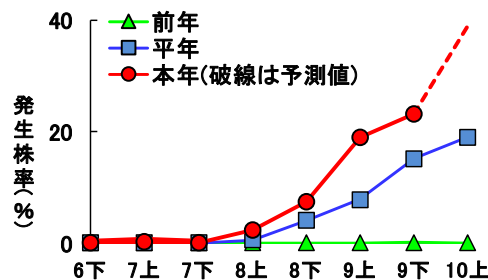


図2 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

大豆

定期調査：22 圃場
調査日：9月17～19日

1. ハスモンヨトウ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0.7%（平年 4.8%、前年 10.1%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）
白変葉発生株率 0.2%（平年 1.4%、前年 1.4%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

② トラップ調査（図2参照）【県内9地点】

平年比：やや少（-～±）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場毎に発生量は異なるため、必ず各圃場での発生状況を確認し、幼虫による加害が続いている圃場では、防除を行う。



定期調査圃場の様子

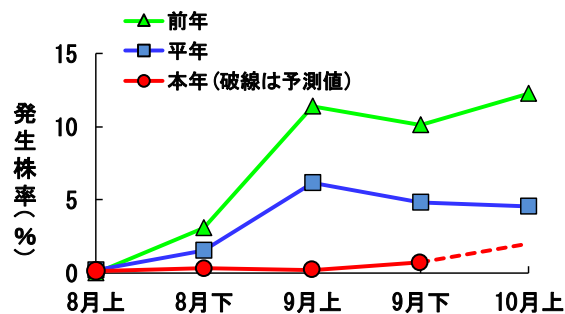


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

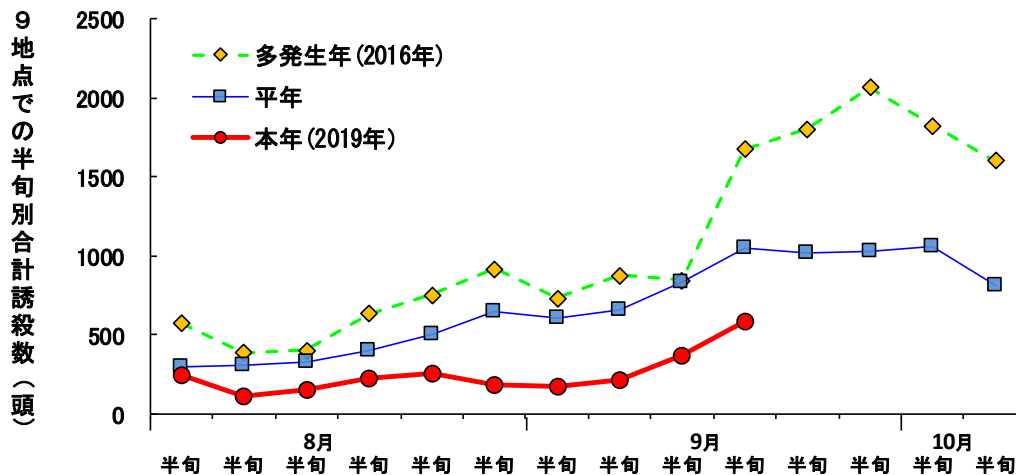


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数 (9月4半旬まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。)

2. カメムシ類 (アオカメムシ, 仔モンジカメムシ, ホリハリカメムシ, ミミアカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 0% (平年 0.3%、前年 0.2%)

平年比: やや少 (一~±) 前年比: やや少 (一~±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

(2) その他については、特記事項を参照。

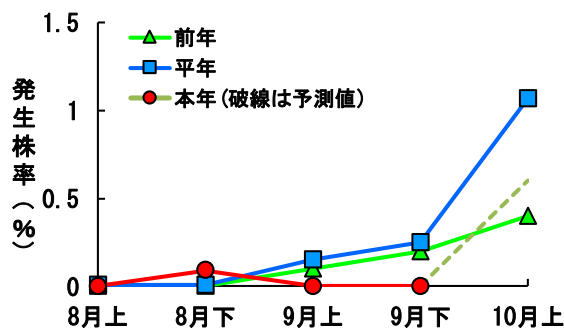


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

イチゴ (本圃)

(定期調査 10 圃場、防除員 2 圃場)

調査日: 9月17~19日

1. ハダニ類

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 3.3% (平年 5.7%、前年 3.3%)

平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

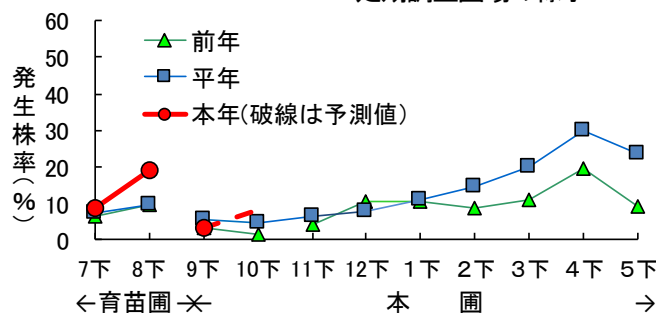


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年2.8%、前年1.9%）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）

(2) 苗の感染程度

本年の本病原菌の苗での越冬程度は平年並と考えられる（9月11日付け病害虫対策資料第9号参照）（±）

(3) 10月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。

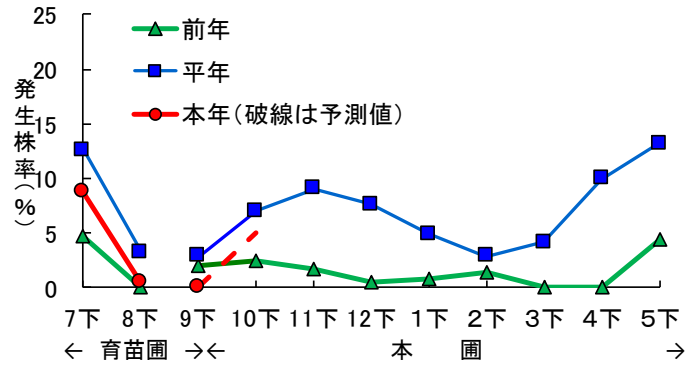


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：3.3%（平年2.8%、前年8.9%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。

(2) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

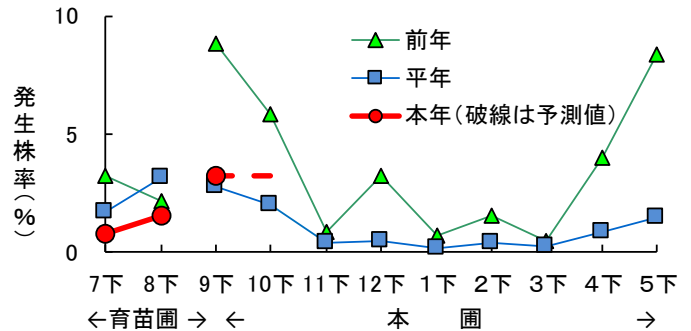


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ（抑制）

（定期調査5圃場、防除員2圃場）

調査日：9月18～24日



定期調査圃場の様子

1. ベと病

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：11.7%（平年6.6%、前年1.9%）

平年比：やや多（±〜+） 前年比：多（+）

(2) 10月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 適正な湿度管理に努める。

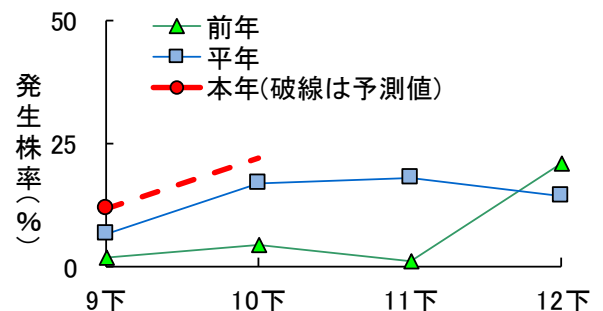


図1 キュウリべと病の発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年8.3%、前年13.8%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 10月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 硫黄粒剤や硫黄水和剤等の耐性菌が出にくい剤を組み入れて薬剤防除を行う。

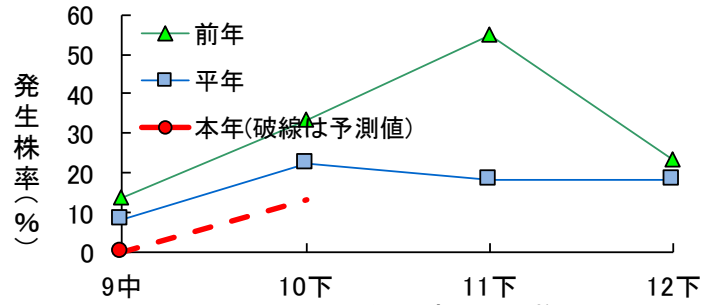


図1 キュウリうどんこ病の発生推移

3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0.8%（平年2.6%、前年3.8%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 10月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

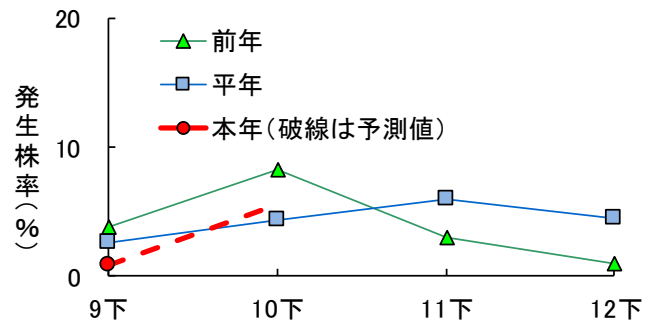


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：4.2%（平年5.4%、前年5.0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

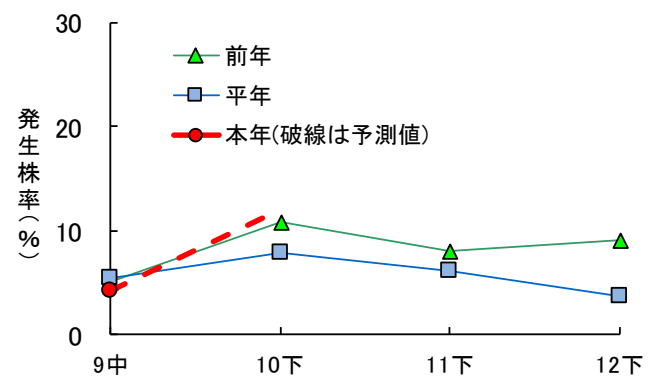


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

ナス（促成）

定期調査：7 圃場
調査日：9 月 19～24 日



定期調査圃場の様子

1. アザミウマ類

【概要に戻る】

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1 参照）
発生株率：13.6%（平年 8.2%、前年 9.2%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）
 - ②10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
 - (2) 10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 施設開口部を防虫ネットで被覆し、ハウスへの侵入を防止する。
 - (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
 - (3) その他については特記事項を参照。

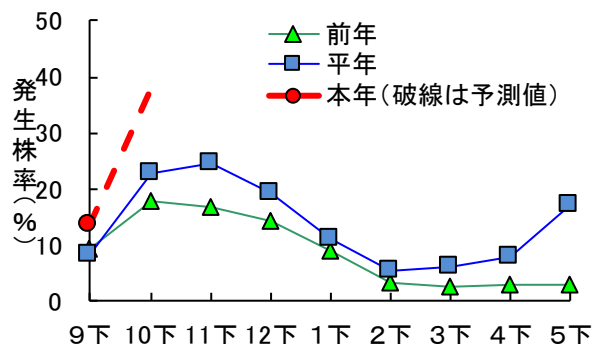


図1 アザミウマ類のナスでの発生推移

2. コナジラミ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1 参照）
発生株率：45.7%（平年 53.7%、前年 40.0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ②10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
 - (2) 10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) アザミウマ類の項と同じ。

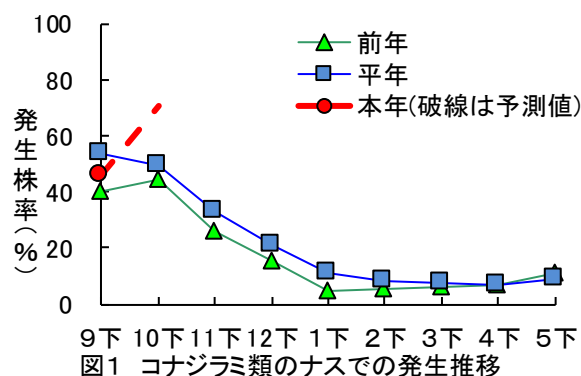


図1 コナジラミ類のナスでの発生推移

アスパラガス

定期調査：8 圃場
調査日：9 月 17～19 日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

【概要に戻る】

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1 参照）
発生株率：0%（平年 5.3%、前年 1.3%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - ②10月の気象予報
気温が平年より高く、多発生の条件（+）

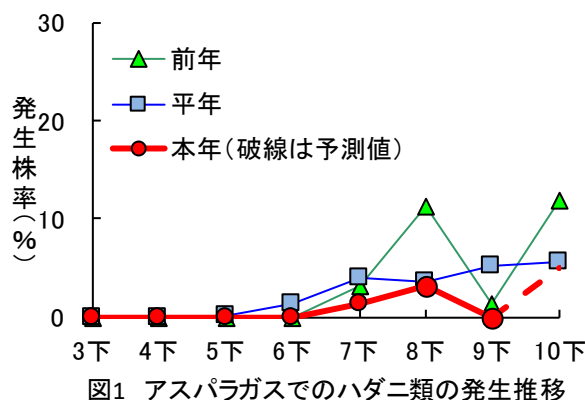


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：23.1%（平年27.4%、前年30.6%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

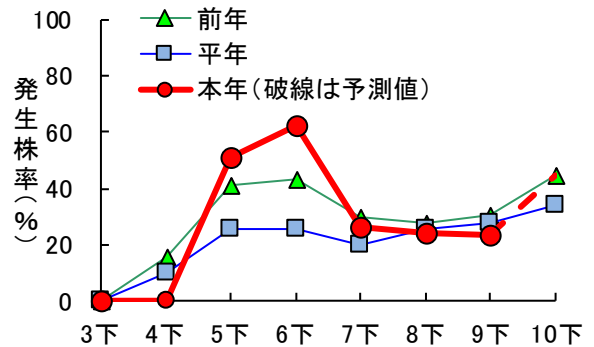


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 若茎及び親茎への本虫による被害を防ぐため、虫見板（約20×30cm）への払い落とし（擬葉部を2～3回叩く）により調査し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。

(2) 多発生圃場では、約7日間隔で2～3回薬剤防除を行う。

3. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：46.9%（平年35.0%、前年40.6%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

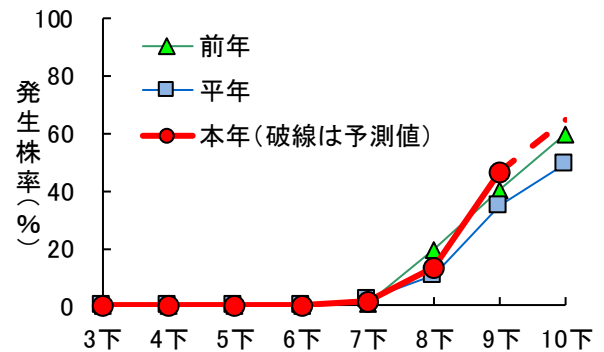


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨時以外は施設開口部を開放し通風を図るとともに、3週間間隔を目安とし薬剤防除を実施する。なお、既発生圃場及び前年多発生圃場、降雨日が続く場合は散布間隔を短縮する。

野菜・花き共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハモンヨトウ、材バコガ、シイモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1～4参照）

作物名	食害株率 (%)	平年比	前年比	平年値 (%)	前年値 (%)
イチゴ	0	やや少（-～±）	少（-）	0.8	3.3
ナス	2.1	やや多（±～+）	並（±）	0.6	2.7
アスパラガス	0	並（±）	並（±）	0.3	0
キク	0	やや少（-～±）	少（-）	1.0	2.0

- ②フェロモントラップによるハスモンヨトウ及びオオタバコガの誘殺数は、平年よりやや少なく推移している(図5~7)。(−~±)
- ③フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺数は、やや多く推移している(図8)。(±~+)

(2) 10月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生程度は、圃場毎に大きく異なるため、必ず圃場での発生状況を確認する。
- (2) 薬剤防除に当たっては、使用方法(収穫前日数等)を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 幼虫は、齢が進むと薬剤の防除効果が上がりにくいいため、若齢幼虫期に防除を行う。

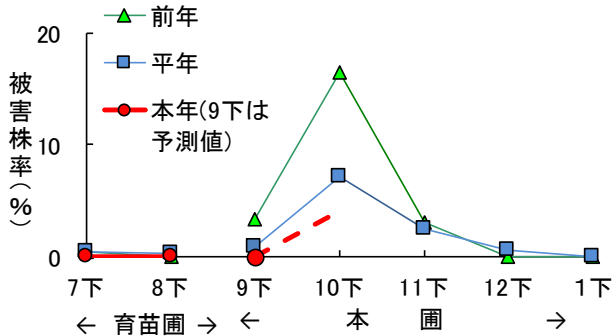


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

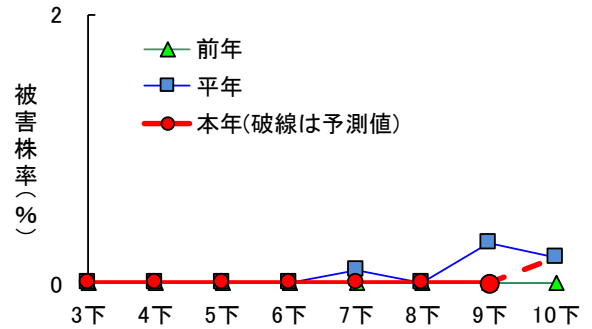


図2 チョウ目害虫のアスパラガスでの被害株率

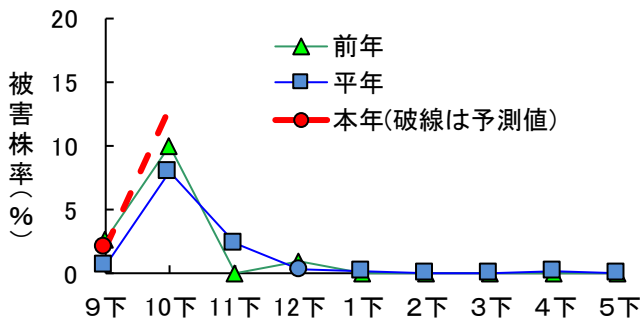


図3 チョウ目害虫によるナシの被害株率の推移

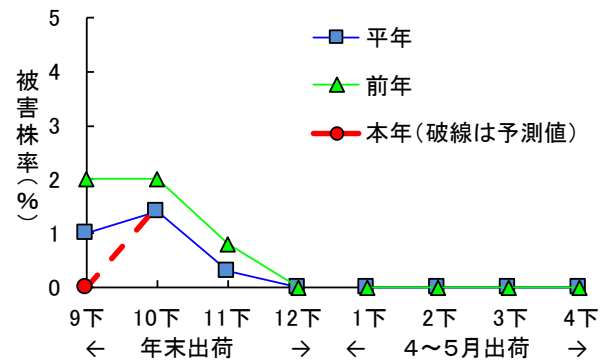


図4 チョウ目害虫によるキウイでの被害株率の推移

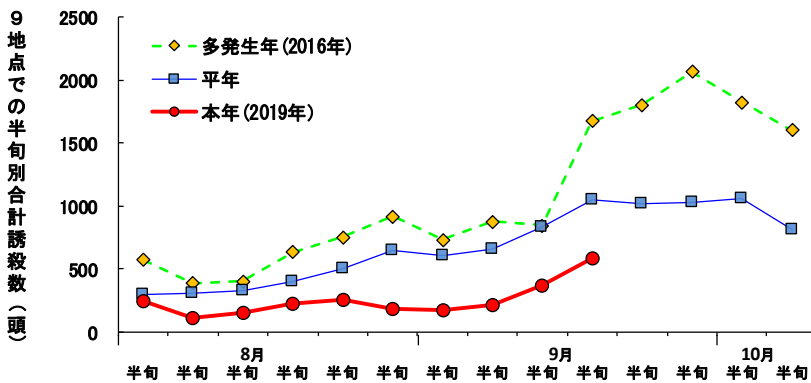


図5 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半月別誘殺数(9月4半月まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。)

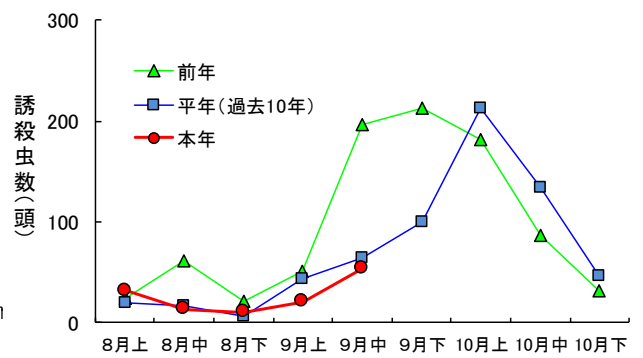


図6 フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数の推移
(病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数)

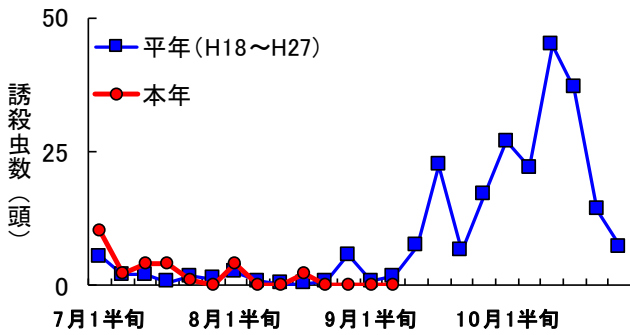


図7 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)
※H28~H30のデータは欠測

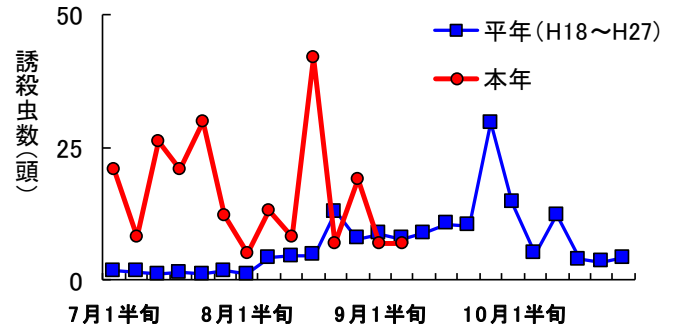


図8 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)
※H28~H30のデータは欠測

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類(本文掲載)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯（図1参照）

平年比：多（+） 前年比：並（±）

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

(2) ヒノキ毬果における寄生数（図3、表1参照、9月17～20日調査）

成幼虫数平均：23.5頭（平年7.9頭、前年調査なし）

平年比：多（+）

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数（図4、表1参照、9月17～20日調査）

口針鞘数平均：20.4本/果（平年17.9本、前年調査なし）

平年比：並（±）

(4) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 合成ピレスロイド系薬剤やネオニコチノイド系薬剤の吸汁阻止効果は10日程度であるが、特にネオニコチノイド系薬剤は積算降雨量が30～50mmに達した時点を目安に再散布を行う。

(2) 合成ピレスロイド系薬剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これらの発生状況に注意して適切に防除対策を行う。

(3) その他については、特記事項を参照する。

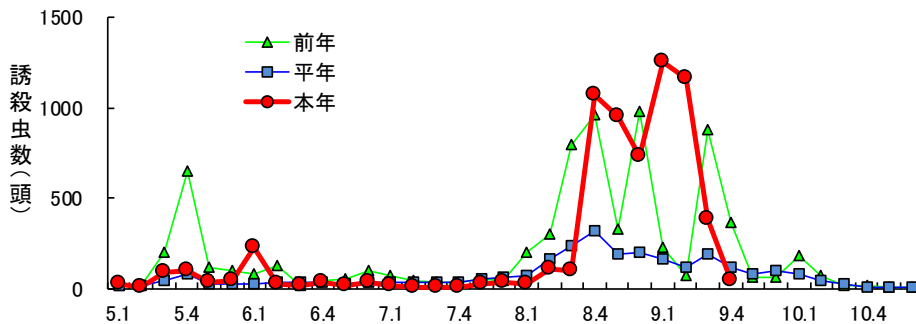


図1 予察灯（佐賀市、太良町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

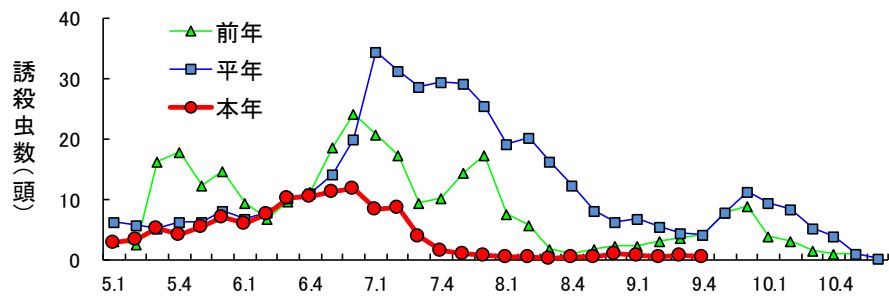


図2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査)）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

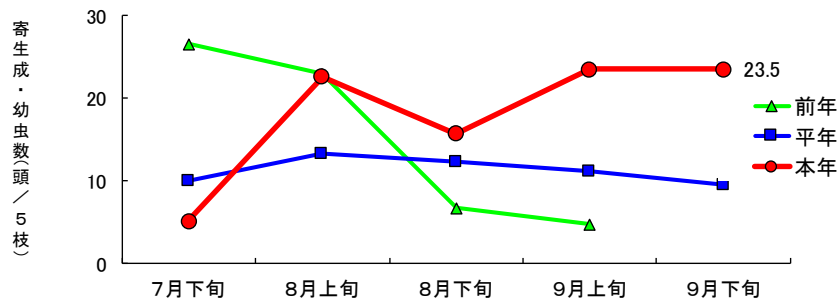


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移（図内の9月下旬の数値は本年値）

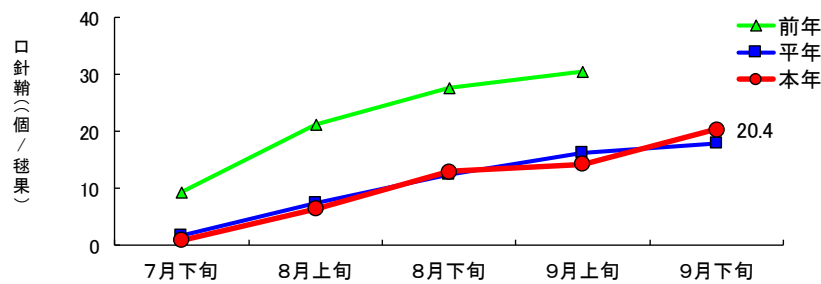


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移（図中の9月下旬の数値は本年値）

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数（図3,4に関する地点別の状況）

No.	調査地	ヒノキ毬果における寄生状況 1)				口針鞘数調査 2) (寄生状況調査時にサンプル採取)		ヒノキ毬果 3) 着果程度
		9月上旬 (9/4~5) 合計	9月下旬(9/17~20)			9月 上月	9月 下旬	
			成虫	幼虫	合計			
1	上峰町	3	15	7	22	5.5	11.5	中
2	神埼市	9	4	0	4	10.7	22.9	中
3	小城市	9	10	7	17	19.7	21.8	多
4	多久市	14	2	0	2	27.3	31.0	中
5	唐津市 1	18	22	0	22	6.4	25.0	中
6	唐津市 2	16	7	1	8	8.1	7.6	多
7	伊万里市 1	23	13	2	15	12.3	25.6	やや多
8	伊万里市 2	16	34	15	49	30.4	23.9	やや多
9	伊万里市 3	28	7	1	8	11.9	23.2	やや少
10	白石町	11	8	4	12	16.8	15.9	多
11	鹿島市 1	8	7	2	9	6.2	8.5	中
12	鹿島市 2	62	93	6	99	11.0	24.6	多
13	鹿島市 3	24	23	1	24	12.9	28.3	少
14	太良町 1	21	7	1	8	26.1	20.9	多
15	太良町 2	90	54	0	54	10.0	15.3	やや多
	平均	23.5	20.4	3.1	23.5	14.3	20.4	やや多
	平年	10.0	-	-	7.9	16.3	17.9	
	前年(H30年)	4.8	5.5	5.3	-	30.6	-	

1)たつき落としによる調査

2)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

3)ヒノキ毬果着果程度:福岡農総試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査(7月下旬調査)

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地形等により差が大きいため、各調査地点の結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8圃場
調査日：9月17日～19日



【概要に戻る】

1. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：5.5%（平年1.3%、前年0.1%）

平年比：多<+> 前年比：多<+>

(2) 10月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が見られる圃場、特に収穫まで期間のある晩生品種等では低密度時からの防除を徹底する。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

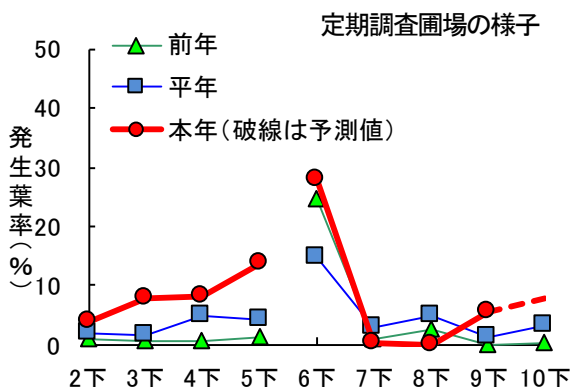


図1 ミカンハダニの発生推移
(注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)

キク

定期調査：8 圃場
調査日：9月17～20日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. アザミウム類（クロゲハナアザミウム、ミナミキイロアザミウム、ミカンキイロアザミウム）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率 11.8%（平年 6.4%、前年 10.8%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本虫の増殖源となる施設内外の雑草を除去する。

(2) ミカンキイロアザミウムは、キクえそ病（TSWV）・茎えそ病（CSNV）のウイルスを媒介するため、発病株は早急に取り除き、本虫の防除を徹底する。

(3) その他は特記事項を参照する。

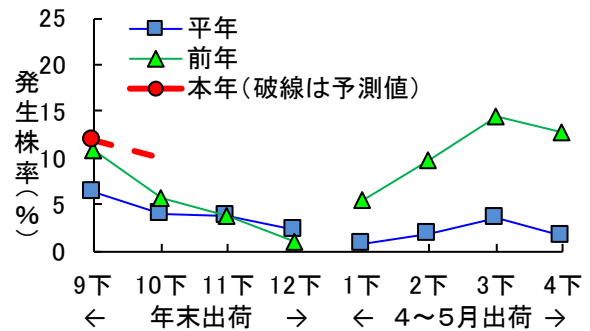


図1 アザミウム類のキクでの発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

発生株率 0.8%（平年 2.9%、前年 4.0%）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

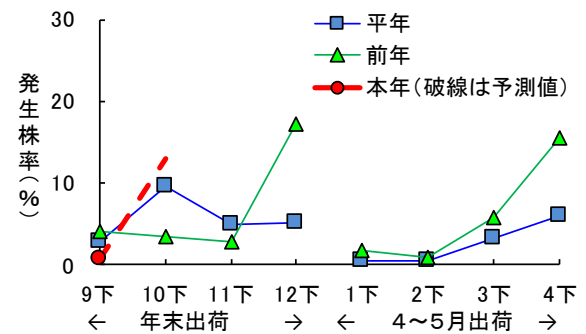


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

3. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査(図1参照)

被害株率 0% (平年 1.0%、前年 2.0%)

平年比: やや少く(ー~±) 前年比: 少く(ー)

② フェロモントラップによる誘殺数

野菜・花き共通の項参照(±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

野菜・花き共通の項参照

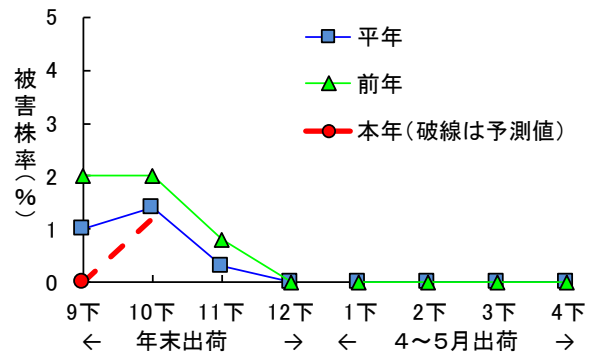


図1 チョウ目害虫によるキクでの被害株率の推移

連絡先: 佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougi jutsu@pref. saga. lg. jp